

「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」

京都外国語大学教授 森 篤嗣^{もり あつし}



1975年、兵庫県生まれ。国立国語研究所准教授、帝塚山大学教授などを経て、現職。国語科教育だけではなく、外国語としての日本語教育の研究にも従事する。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。

今回は、内容言語統合型学習CLIL（クリル）による、英語と他教科等の内容を同時に学ぶ方法をご紹介します。

CLIL（クリル）とは

まだ現場では耳慣れない言葉だと思いがちですが、CLILとは、Content and Language Integrated Learningの略で、その頭文字を取ってCLIL（クリル）とよびます。日本語では「内容言語統合型学習」と訳されます。その名称からもわかるように、学習する内容と言語学習とを統合して同時に学ぶ方法です。すなわち、「言語を学ぶ」のではなく「言語で学ぶ」ということになります。

学習者の言語活動を重視するという点は、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」にも近いといえます。日本においては、年少者のための日本語教育（外国にルーツをもつ児

童・生徒対象）や、介護・看護の日本語教育などで内容を重視した教育が実施されています。

小学校における外国語活動・外国語科における英語指導についても、「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」という方向性は大きな可能性があるといえます。そこで、今回はこのCLILを取り上げ、学習する内容と言語学習とを統合して同時に学ぶ方法について具体的な授業事例に則して考えていきたいと思います。

CLILの特徴（4C）

CLILの特徴は、Content（内容）、Communication（言語知識・言語活用）、

継続的知識といえます。CLILでは特に継続的知識を重視しますので、言語活動を通して「できる」知識の獲得を目指します。

② Communication（言語知識・言語活用）

CLILでは文法や文字などの「言語知識の学習」、文章構成のしかたや話し方などの「言語スキルの学習」、作文やスピーチなどの「学習を通して言語使用」という「3つの言語」を授業設計に組み入れます。内容言語統合型学習というと「学習を通して言語使用」だけが重要だと思ってしまうがちですが、そこに至るまでに「言語知識の学習」「言語スキルの学習」を計画的に組み入れないとバランスが悪くなってしまいます。国語の授業では、「言語活動」のみに目がいつて、「つけたたい力」を見失ってしまうのが、まさにこのケースです。

③ Cognition（思考）

CLILでは、「記憶」や「理解」といった「知っている」ことだけでなく、「受容・応用」「分析」「評価」「創造」といった分かる・使える高次の思考を伸ばすことを目的としています。具体的思考だけではなく、抽象的思考を重んじるということになります。これを達成するには、学習者が自力で解決できない課題に対する教師の支援（スキャフォールディング「足場かけ」）をいかに効

果的に行うかがカギになります。

④ Community（協働学習・異文化理解）

CLILでは、ペアワークやグループワークなどの協働学習を頻繁に取り入れます。小学校であれば、教室にいる他者の経験や意見に耳を傾けるためということになります。ただ、日本の小学校教育におけるクラスは同年齢かつ同質な集団であることが多いため、Community（協働学習・異文化理解）を重視するには、教室の枠を越えた交流（教室外や学外に出る、学外から人を呼ぶ）なども必要になってくるでしょう。

内容と思考を重視しよう

それぞれ説明してきたCLILの4つの特徴のうち、Communication（言語知識・言語活用）とCommunity（協働学習・異文化理解）については、先にも述べたとおり新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」でも重要な概念ですので、特段にCLILでだけ強調することではないでしょう。

CLILによる授業づくりで重視したいのは、Content（内容）とCognition（思考）です。特に「内容」については、外国語活動・外国語科において、他教科の内容を扱う

ことで、児童の既存の知識を活用した活動を英語でなぞっていくことが可能となります。

例えば、国語の「内容」を扱う場合の例をご紹介します。小学校六年生を対象に、五年生で学習した「和語・漢語・外来語」を扱います。

Where is (品名) from?
Its from (国名).

右記の文型のほかに、品名と国名をあらかじめ学習しておきます。品名や国名はカードを作成しておく、よりスムーズです。最初は教師からクイズを出して児童が答えますが、慣れれば児童どうしでクイズを出し合います。「どの国から来た言葉なのか」という内容に関わる知的好奇心が重要です。

これは一例ですが、CLILの内容言語統合型学習では、他教科など既存の知識を最大限に活用して「英語で」学びます。国語・算数・理科・社会だけではなく、音楽・図工・体育なども対象になります。いえ、むしろ実技教科のほうが、「聞いて、理解して、活動する」というプロセスを主としているため、CLILに向いているとさえいえるでしょう。

【参考】

○奥野由紀子（編著）（二〇一八）「日本語教師のためのCLIL（内容言語統合型学習）入門」凡人社
○注目の指導法「CLIL」を使った小学校の授業
<https://world-family.co.jp/why/news/201804-02.html>